

“MY TOWN” うおっちんで
歩キ**目**デス
 & **足**ラテス

Vol.36

「自立する像たち…
 旧大洲市の場合」

タウンツーリズム講座
 岡崎直司

今回のウォッチングは自立がテーマ。自分で立つ、フーム。その時、天から声が、「銅像を調べよ」と。そんなワケで、旧大洲市内にある学校の銅像探検に出かけた。何故大洲かというと、通常は「二宮金次郎」の銅像が通り相場だが、この街にはもう一つの、いや、他にも違う像が見られて興味深いノダ。

大洲地方のその方面の代表選手と言えば、やはり江戸初期の陽明学者中江藤樹。観光的には、今も大洲城跡にあるものが有名だが、天守閣の木造復元前は、まさにその場所にあり市民に親しまれた。しかし大洲では、教育的見地から市内の学校でもその像が見られたりする。かつて屋敷跡のあった大洲高校を始め、大洲小、喜多小、大成小などである。

中江藤樹（一六〇八〜四八）は、加藤家に付き従い、近江安曇川から米子へと移り、そして



平野小学校

十歳の時大洲へとやってくる。当初は祖父の任地である風早郡（今の北条柳原）で勉学に励み、四書五経の内「大学」を読み十一歳で立志。つまりこの少年は、小学校六年生くらいで早くも精神的に自立してしまっただ。十四歳で大洲に戻り、文武両道に励み、二十歳で門人たちに「大学」を教えている。二十七歳で思うところあって官を辞し、近江へ戻って以降は村人や門人に学問を教える。その教化は、熊沢蕃山や^{おの}岡山などの学者を生む。かくして日本で初めて陽明学が確立されてゆき、当時の幕藩体制下の主流朱子学に対することとなる。近江聖人と呼ばれ、四十一歳で没する。

さて、銅像で見てみよう。大洲・喜多・大成各小学校にある少年像は、まさに旅立ちの装いで、りりしく一歩足を踏み出し、清新の気に満ちている。いずれも昭和三十三年、八幡浜の彫塑家塩崎宇宙氏の製作。大洲小には、このほか室内に漆喰と銅錫製の二体があり、どちらも老

三善小学校



大洲小学校



大洲小学校



大洲高校



大成小学校





大洲城

後は全て陶製の金次郎である。今回の調査で興味深いことが分かった。蔵川小は、昭和十三年、三善小は同十五年、どちらも銅像で建てられたが、直ぐに戦時体制となり国に

成した座像となっている。

大洲高校のものは、青年像で前述の何れとも異なり、青年期の座像、辞職願いの際の様子が表示されているとのこと。また校内には、昔日の屋敷を昭和十四年に再現した「至徳堂」と呼ばれる建物もある。

一方、城山のもものは、当初明治三十五年建てられたが、現在のものは、戦後昭和二十七年、三度目の铸造と伝わる。その像からは、「良知に至る」という考えを元に「知行合一」を唱えた、陽明学の祖最晩年の風格が漂っている。

さて、学校においてポピュラーな二宮金次郎（二七八七〜一八五六）の方はどうだろう。市内の八校に像があるという。平野・粟津・三善・新谷・柳沢・菅田・南久米・蔵川の各小学校である。この内、平野・新谷・菅田の三校が銅像で、

供出（戦備の資源）された。それで後に陶製の像が再建されている。従って、どうやら五体の陶製金次郎は戦前期のもの、三体の銅像は戦後のもの、ということに。新谷小は昭和三十三年、平野小は同三十七年に除幕式をしている。不思議なのはふくよかな三善小の陶製金次郎で、何と金色をしている。ハテ、名前にあやかっただか。

これらの像であるが、薪を背負い、本を読むという王道の金次郎スタイル。気になるのは、一体ナニを読んでいるのか、ということ。写真のごとく、キチンと漢文が刻まれており、「大学」の一節。因みに「一家仁一国興仁 一家讓一国興讓 一人貪戾一国作乱 其機如此」と書かれていて、「一家に仁愛の徳があれば国中にも仁愛が起こり、一家に謙讓の徳あれば国中にも徳が起こる。君主一人がデタラメなら国中が乱となり、理由はそんなところにある」というような修身の意味らしい。戦前、昭和初期には、日本中の学校にこの像が建てられてゆき、学校教育の象徴となるが、時代の波に翻弄されつつも、例えば蔵川小のように、地域を上げて昭和十二年から「尊徳祭」が毎年連綿と六十八回（昨年）も継続されている所もある。アッパレ金次郎。

この他、大洲小・三善小には野口英世の像、久米小には郷土の偉人、国学者矢野玄道の石造などもある。いやはや旧大洲市は、自立する像たちでとてにぎわっている地域である。

矢野玄道像



野口英世像（大洲小）



蔵川小学校



久米小学校



平野小学校

